漱石「函山雑咏」試考
――どちらに帰るか――

高　橋　朱　子

はじめに

「函山雑咏」[1] は明治二十三年、漱石が第一高等中学校卒業後、箱根へ旅したときにうみだされた八首の詩の総題である。漱石漢詩にはこれまで多くの注釈がつけられているが[2]、本稿は諸注釈に学びつつ更に分析を試みた結果として、作者が狙っただろう表現意図と、作者が意識した「函山雑咏」全体のテーマを提示するものである。

「函山雑咏」はそのテーマのゆえに「其一」から「其八」まで物語風に時間を追って並べられており、本稿では作者の意を汲み取るために順番に読んでいく方法をとる。

一

二十三年七月、漱石の友人であり、「函山雑咏」の添削者にもなった正岡子規は、卒業試験が終わるなり早々と松山に帰郷する。愉快な議論仲間を失った漱石は長文の手紙を子規に送り、それから八月末まで数回に渡って文学史上有名な議論が東京松山間で交わされることになる。漱石の最後の手紙は八月末彼が箱根へ旅立つ直前に書かれた。書中彼は今回の旅について「君の説論を受けても浮世ハ矢張り面白くもならず夫故明日より箱根の霊泉に浴し又々昼寐して美人でも可夢候」[3] と言う。「君の説論」とは先の八月九日漱石書簡のぼやきに対する八月十五日子規書簡のお説教を指す。ぼやきは、「此頃は何となく浮世がいやになりどう考へても考へ直してもいやで立ち切れず去りとて自殺する程の勇気もなきは矢張り人間らしき所が幾分かあるせいならんか」。お説教の方は、「けし粒程の世界に邪魔がられ、うぢ虫めいた人間に追放せらるゝとハ、ても扨も情なきことならずや」[4]。

同子規書簡には文学者の創作動機について説かれている。「どういふ風にしたら詩神にインスパイヤせられるかといふに世俗を棄てゝ塵外に遊び時候の善き処景色のよき処を撰ハざるべからず、詩歌的小説を作るも亦同じ理也…淵明

冠を掛けて菊を東籬にとらずんバ帰去来の賦なかるべく…」。子規がここで陶淵明に言及していることは重要である。なぜならまるでこの言葉を受けたかのように、「函山雑咏」は陶淵明のイメージを散りばめているからだ。そのイメージとは、連綿と受け継がれてきた、あの帰隠の代表者たる陶淵明のそれである。つまり漱石は陶淵明を自分の「浮世がいやになり」という感情に合わせて捉えているのだ。その漱石の陶淵明への傾斜、陶淵明的帰隠の世界への憧れは、「浮世ハ矢張り面白くもならず」という愚痴の後の無題詩にすぐ表わされている。

仙人墮俗界、遂不免喜悲。啼血又吐血、憔悴憐君姿。漱石又枕石、固陋歓吾痴。君痾猶可癒、僕痴不可医。素懐定沈鬱、愁緒乱如糸。浩歌時幾曲、(一句欠)。一曲唾壷砕、二曲双涙垂。曲闋呼咄咄、衷情欲訴誰。白雲蓬勃起、天際看蛟螭。笑指函山頂、去臥葦湖湄。歳月固悠久、宇宙独無涯。蜉蝣飛湫上、大鵬嗤其卑。嗤者亦泯滅、得喪皆一時。寄語功名客、役役欲何為。(仙人 俗界に墮つれば、遂に喜悲を免れず。啼血又た吐血、憔悴 君が姿を憐れむ。漱石又た枕石、固陋 吾が痴を歓ぶ。君が痾 猶お癒すべく、僕が痴医すべからず。素懐 定めて沈鬱ならん、愁緒 乱れて糸の如し。浩歌 時に幾曲、(一句欠)。一曲 唾壷砕け、二曲 双涙垂る。曲闋りて呼ぶこと咄咄、衷情 誰にか訴えんと欲する。白雲 蓬勃として起り、天際 蛟螭を看る。笑って函山の頂を指さし、去きて葦湖の湄に臥せん。歳月 固より悠久、宇宙 独り涯無し。蜉蝣 湫上を飛べば、大鵬 其の卑きを嗤う。嗤う者も亦た泯滅す、得喪 皆一時。語を寄す 功名の客に、役役 何をか為さんと欲すと。)

十七句目の「白雲」は続く「函山雑咏」本詩にも登場するキーワードである。漱石の他の詩にも用いられているので、漱石と陶淵明の関係については充分諸注釈に指摘されているが、改めて陶淵明の「白雲」を挙げると、「和郭主簿二首 其一」の「遥遥望白雲、懐古一何深」、「擬古九首 其五」の「東方有一士、被服常不完…青松夾路生、白雲宿簷端」である。この陶淵明の「白雲」の他に、このとき漱石が思い浮かべたのは、李白「望終南山寄紫閣隠者」の「有時白雲起、天際自舒巻…何当造幽人、滅跡棲絶巘(時有りて白雲起こり、天際自ら舒巻す…何ぞ当に幽人に造り、跡を滅して絶巘に棲むべき)」ではないだろうか。この詩のように、白雲に誘われるままに浮世の累いから逃れ、浮世の何も及ばない空間へ去ること、それが漱石の願いである。

ではなぜ漱石が「白雲」の後に「蛟螭」と続け、何となく白雲の持つ帰隠のイメージから読者の目を逸らさせているかというと、それはこの詩がまず子規

に応えるものであることに理由がある。詩の前半で漱石は子規の衰弱とその衰姿に似合わぬ相変わらずの豪快な言行を、親友として心配し愛しつつユニークに描く。そして後半では子規の志の大きさを『荘子』の大鵬に、自分をちっぽけな虫に喩えて、大鵬に笑わせる。血を吐く哀れな友を『荘子』のシンボルへ引きあげる、その過程の丁度中間に作者は白雲の連想のように龍を登場させ、地べたから広大な空へと目を向けさせ、子規の大志を認めることに意を用いているのである。

但し、漱石が子規を引きあげるだけでなくやはり子規の悪口に応えて笑い返していること、更に自身の帰隠への思いを確認しているのも最後に明らかである。「得喪皆一時」と「功名客」は、陶淵明「五柳先生伝」の「忘懐得失」、「祭従弟敬遠文」の「心遺得失」、「擬古九首 其四」の「古時功名士、慷慨争此場。一旦百歳後、相与還北邙」などを意識する。漱石が見る子規はあくまで浮世で功名に拘る、即ち浮世で何か為さんとして、王敦ばりに唾壺を砕く慷慨の男なのである。そのような子規と比べると、漱石は自分が功名のために生きる志を持たない者であることを自覚せざるを得ない。書簡によると、子規は当時「四国仙人」と自称し、漱石は「埋塵道人」と称している。実際表面上は、田舎でのんびり療養しつつ読書している子規は、紅塵舞い上がる東京で愚痴を言う相手もいない漱石から見ると、浮世離れした仙人であろう(5)。しかし、このとき漱石の浮世からの脱出の願いが強まっているゆえに、彼は心を急激に陶淵明に接近させた上、陶淵明的な俗対隠の価値観でもって無理やりに仙人たる子規を俗に墮して俗の代表者に仕立て、皮肉らずにはいられないのである。

少し戻るが、「大鵬嗤其卑、嗤者亦泯滅」という奇妙な表現も、子規との関係と、自己の陶淵明への傾斜に関係している。蘇軾の「和頓教授見寄、用除夜韻」に「我笑陶淵明、種秫二頃半…笑人還自笑、出口談治乱。一生溷塵垢、晩以道自盥（我は笑う陶淵明、秫を二頃半に種う…人を笑って還た自ら笑う、口より出でて治乱を談ず。一生塵垢に溷れ、晩に道を以て自ら盥ぐ）」とある。漱石が本来笑う筈のない大鵬に笑わせているのは、蘇軾の詩の登場人物を子規と自分に当て嵌めているためだ。そして漱石は塵垢を離れた陶淵明そのものになりたいと仄めかしてもいるわけである(6)。

以上のように旅立つ直前の漱石の詩は、子規をかなり意識して彼に皮肉で応えることを主旨にしていると言える。しかし漱石が始めから陶淵明的世界に憧れて箱根へ行くつもりであること、自分を陶淵明のような人物に擬えようとしていることをさりげなく明らかにしていることも分かる。

漱石は浮世を離れてこれから向かおうとする函山を笑って指差す。その行為は子規への皮肉ではない。白居易「戯贈李十三判官」に「垂鞭相送酔醺醺、遥見廬山指似君。想君初覚従軍楽、未愛香炉峰上雲（鞭を垂れ相送りて酔醺醺たり、遥かに廬山を見て指して君に似(しめ)す。想う 君初めて従軍の楽を覚え、未だ香炉峰上の雲を愛せざるを）」のように、友に軽く自分の志を見せるだけである。蘇軾「留別蹇道士拱辰」の「晩識此道師、似有宿世情。笑指北山雲、訶我不帰耕（晩に識る此の道師、宿世の情有るに似たり。笑って指す北山の雲、我の帰耕せざるを訶む）」のように、自分の帰隠の志を確認し、まだそうしていない自分を見出して諫めつつ、まだ得ていない帰隠の安らぎを想って笑うのである。

二

昨夜着征衣、今朝入翠微。雲深山欲滅、天闊鳥頻飛。駅馬鈴声遠、行人笑語稀。蕭蕭三十里、孤客已思帰。（昨夜 征衣を着け、今朝 翠微に入る。雲深く山滅せんと欲し、天闊く鳥頻りに飛ぶ。駅馬 鈴声遠く、行人 笑語稀なり。蕭蕭たる三十里、孤客 已に帰るを思う。）

函嶺勢崢嶸、登来廿里程。雲従鞋底湧、路自帽頭生。孤駅空辺起、廃関天際横。停筇時一顧、蒼靄隔田城。（函嶺 勢い崢嶸、登り来る 廿里の程。雲は鞋底従り湧き、路は帽頭自り生ず。孤駅 空辺に起り、廃関 天際に横たわる。筇を停めて時に一顧すれば、蒼靄 田城を隔つ。）

来相峰勢雄、恰似上蒼穹。落日千山外、号風万壑中。馬陘逢水絶、鳥路入天通。決眥西方望、玲瓏岳雪紅。（相に来たれば峰勢雄にして、恰も蒼穹に上るに似たり。落日 千山の外、号風 万壑の中。馬陘は水に逢うて絶ゆるも、鳥路は天に入りて通ぜり。眥を決して西方を望めば、玲瓏として岳雪紅なり。）

「其一」から「其三」まで、まず詩人が憧れの陶淵明的世界へ徐々に登ってゆく様が表わされている。詩を構成する道具立てや用法は李白や蘇軾の山に関する詩に倣っただけで、奇抜な表現を努めて避け、天下の険たる箱根の山を独特に表現することもしていない。

一首目にすぐ気づくのは深い雲。それは漱石が脱したかった俗と非俗を隔てる幕であり、その非俗側へ入ったことを意識した途端に鳥が目に入る。鳥は陶淵明的世界では必ず帰るべきところへ帰る（「帰去来」鳥倦飛而知還）隠士の姿である。馬と人という、浮世で日々目にする煩わしい存在は少しずつ遠ざかり、浮世でこそ聞くことができる人々の笑い声もほとんど耳にしない。陶淵明

が「飲酒其五」に詠う「而無車馬喧」の世界に近づいているのである。しかしそのとき漱石が思うのは、なぜか帰ることだ。私は意識的に帰隠という言葉を使ってきたが、漱石が憧れる陶淵明や陶淵明的世界を描く詩人達が帰ると言うとき、それはそのまま故郷に帰ることであり、即ち官を辞め功名のためにあくせくする俗の世界を離れることである。ところが、ここで漱石が帰ると言うとき、それは故郷に帰ることを意味するが、彼の故郷は彼が嫌悪する俗の世界なのである。漱石は雲深い山に入り帰隠の疑似体験をしながらも、自分が本来帰るべき場所が雲の中ではなく、帰隠の士と反対に自分が故郷を離れて彷徨う孤鳥でしかないことに気づき、不安を覚える。そしてその自分の憧れるところと本当に帰らなければならないところとの齟齬への不安と、自分の本当の志への疑問を抱えつつ山を登り続ける。

二首目、箱根山に登った距離が「廿里程」と表現されることに違和感を覚える。箱根は八里と表わされることが多く、前年子規も「汽車過東海道壮快甚乃賦長篇」に「函嶺八里馬可攀」と詠んでいる(7)。二十里とは、諸注釈が言うように中国里に言い換えたのではなく、一首目に東京から三十里と言ったことに対応させたものである。このとき漱石のいるところから二十里前というと、ほぼ現在の横浜市保土ヶ谷区あたり、即ち『東海道中膝栗毛』「初編」に「品野坂といふところにいたる。是なん武州相劦の境なりときけば、玉くしげふたつにわかる国境所かはればしなの坂より」(日本古典文学大系 岩波書店 1958)とある場所に該当する。つまり漱石にとって箱根山とは故国を出たところから始まるのである。なぜ漱石がそのような紛らわしい認識を披露しているのかというと、このときの彼にとっては山というのが浮世から離れた異空間を表わす言葉であるためだ。山の下にある東京へ、数日後には自分の思いとは関係なく大学入学のため帰らねばならない、そのような帰郷の予定を意識して、漱石は帰らなければならない場所と帰りたい場所の距離を測っているのである。

雲は自分の下から立ち上るものとなり、従って詩人はいよいよ雲の幕の内側である非俗の世界に入っていることを感じる。杖は陶淵明や白居易も愛した隠者のアイテムであり、それを握って後ろを振り返ると、陶淵明が「帰園田居五首 其一」に「曖曖遠人村、依依墟里煙」と詠んだのにも似た気分を味わうことができる。三首目では、一首目に登場した俗世の騒がしさを表わす馬が、俗と非俗を繋ぐ人為的な道の断絶によって排除せられ、自由な鳥だけが飛びまわる。詩人は自分の帰隠への憧れを口にせず、帰郷の願いも口にせず、ただ心で思いながら、実際のところは自分が願って果せる筈もない帰隠の世界の方に奥

深く踏み込んでいることを覚える。そして紅く染まる富士に誘われるようにして更に西へ、即ち故郷とは反対の方向を見詰めるのである。

三

「其三」の夕暮れを受けて「其四」には宿の夜が記される。

飄然辞故国、来宿葦湖湄。排悶何須酒、遣閑只有詩。古関秋至早、癈道馬行遅。一夜征人夢、無端落柳枝。（飄然として故国を辞し、来たり宿る 葦湖の湄。悶を排するに何ぞ酒を須いん、閑を遣るに只だ詩有るのみ。古関秋の至ること早く、癈道 馬の行くこと遅し。一夜 征人の夢、端無くも柳枝に落つ。）

一句目は、杜甫「舟出江陵南浦奉鄭少尹審」の「更欲投何処、飄然去此都。形骸元土木、舟楫復江湖（更に何の処にか投ぜんと欲する、飄然として此の都を去る。形骸は元より土木、舟楫 江湖に復る）」を意識しただろうか。漱石は改めて浮世が嫌だと言って故郷を離れてきたことを思い、また自分が陶淵明達とは異なって帰隠することもできない、単なる根無し草であることを認める。

しかし宿したときに到って、彼はやはり自分が陶淵明に憧れていることも自覚する。「排悶何須酒、遣閑只有詩」には諸注釈が杜甫「可惜」の「寛心応是酒、遣興莫過詩（心を寛くするは応に是れ酒なるべく、興を遣るは詩に過ぐる莫し）」を挙げる。この詩の重要なのは、更にその後に続く「此意陶潜解、吾生後汝期（此の意 陶潜のみ解す、吾が生 汝が期に後れたり）」の部分である。これは杜甫の陶淵明への憧れを明確に示すものであり、漱石が杜甫に自分を重ねていることも明らかなのである。

また、漱石が夢に見た「柳枝」も陶淵明の「五柳」を指す。このとき彼が学んだ陶淵明ファンは李白であり、「寄韋南陵冰、余江上乗興訪之、遇尋顔尚書、笑有此贈」に「夢見五柳枝、已堪挂馬鞭。何日到彭沢、長歌陶令前（夢に見る五柳の枝、已に馬鞭を挂くるに堪えたり。何れの日か彭沢に到り、陶令の前に長歌せん）」とある。陶淵明と言えば五本柳を思うが、李白は他に「題東谿公幽居」の「門垂碧柳似陶潜」、「留別龔処士」の「柳深陶令宅」と、数を気にせず柳を陶淵明と結びつけている。我が国の四方赤良（大田南畝）も「世のうさを柳にやらでませ垣のきくとひとしくかへんなんいざ」（「徳和歌後万載集」『大田南畝全集』第一巻 岩波書店 1985）と詠うように、陶淵明の柳をいちいち五本と言わないことは珍しくない。また、劉長卿「酬秦系」の「最憶門前柳、閑居手自栽」、蘇軾「和子由与顔長道同遊百歩洪相地築亭種柳」の「山中故人応大笑、

築室種柳何時還」のごとく、陶淵明を登場させなくとも柳が帰隠のイメージになっている詩は数多い。このようなことから、漱石が夢みた柳は帰隠の象徴と捉えて良いだろう。漱石は山を登り始めて「帰」という言葉について自分の中にジレンマが起こることを認め、夜までそれを口にすることを避けてきたが、そのジレンマを越えて帰隠への憧れが強まっていることに気づいたのである。

ところが「柳枝」については、一海氏注に「柳の枝を手折って見送ってくれた人、という意をふくむかも知れず」とあり、この漱石が故郷を振り返るという解釈も全然無視できない。なぜなら一年前の『木屑録』所収「別後憶京中諸友」に「魂飛千里墨江湄、湄上画楼楊柳枝」(8)とあるためである。これによると、漱石にとって柳は単に旅人を送る道具であるよりも、隅田川周辺に折っても余りあるほど揺れている、直接的に故郷を思い出させるものであると分かる。そこで、夢に見た柳は別れてきた特定の人を指すのではないけれども、去ってきた故国を想うという意味には取れるのである。

「柳枝」の二つのまるで背反する解釈がそれぞれ可能なのだが、漱石はどちらにも取れるよう意識的にこの言葉を使ったのではないだろうか。彼は帰隠への志が強まることの自覚を詠いつつ、前年に同じく旅先で自分が柳を反対の帰郷への思いを表現するために用いたことを思い出さずにはいられなかっただろう。そして今自分が帰らなければならないところは、やはり隠に反する浮世の東京であるという事実もまた、帰隠への志向が強まれば強まるほど、逃れられないこととして迫ってくる。「柳枝」は二つのベクトルを持つ「帰」の象徴として、詩人の偽りのない志を表わす言葉であると思う。

四

二つの「帰」の葛藤を経て改めて陶淵明への憧れを自覚した詩人は、「其五」でようやく旅前の詩に通じる明るい調子を取り戻す。

百念冷如灰、霊泉洗俗埃。鳥啼天自曙、衣冷雨将来。幽樹没青靄、閑花落碧苔。悠悠帰思少、臥見白雲堆。（百念 冷えて灰の如く、霊泉 俗埃を洗う。鳥啼いて天自ら曙け、衣冷かにして雨将に来たらんとす。幽樹 青靄に没し、閑花 碧苔に落つ。悠悠として帰思少く、臥して白雲の堆きを見る。）

冒頭、南畝『四方のあか』「大根太木屋積楼記」（『大田南畝全集』巻一）の「四つ切の出入しげき夕べ、日なしかしのかしがましき日は、許由が耳を銭湯にあらひ、伯夷が蕨を八百屋にとり、松風のねを菓子屋にきく」を思い出させる。笑うことを思い出した詩人は旅前に詠んだ「白雲」を、今目の前にあるものと

して再び詠む。それは陶淵明の見た白雲であり、陶淵明に倣った詩人達、例えば王維の「帰輞川作」に「悠然遠山暮、独向白雲帰」と描かれるように、身を帰したいところに必ず浮かんでいる帰隠のしるしである。漱石は逃れたい浮世を振り返り、あちらが帰らなければならないところだと思い続けてきたが、自分が旅前に思っていたようにやはり浮世と隔絶した白雲の中こそ本当に行きたいところだと確認し得たことによって、白雲を詠むことができたのである。

「白雲堆」は陸游「記閑」の「白雲堆裏看青山、猿鳥為隣日往還（白雲堆裏に青山を看、猿鳥隣と為りて日に往還す）」、「閑遊」の「大冠長剣已焉哉、短褐禿巾帰去来…自笑閑遊心未歇、青鞋蹋砕白雲堆（大冠長剣焉に已まん哉、短褐禿巾帰りなんいざ…自ら閑遊して心未だ歇きざるを笑う、青鞋白雲の堆きを蹋砕す）」を意識。漱石が白雲に臥すのではなく白雲を臥して見ると表現していることは注意すべきだろう。雲に臥すという表現は李白「白雲歌、送劉十六帰山」の「白雲堪臥君早帰（白雲臥すに堪えたり君早く帰れ）」の他、帰隠に憧れる詩人達が数多く使っている。それに対し、わざわざ臥して白雲を見るというのは、漱石が自分は白雲の中に棲む者ではなく、そこもやがて去らなければならない者であると認めることを示すのではないだろうか。詩中の「帰思」は帰郷の思いを指す。帰郷したくない、そして陶淵明に憧れる思いは強まるが自分は帰隠の士になり得ない。そのことをはっきりと理解したので、彼は束の間の陶淵明的世界の生活を楽しむように寝転んで白雲を眺めているのである。

五

奈此宿痾何、眼花凝似珂。豪懐空挫折、壮志欲蹉跎。山老雲行急、雨新水響多。半宵眠不得、燈下黙看蛾。（此の宿痾を奈何せん、眼花 凝りて珂に似たり。豪懐 空しく挫折し、壮志 蹉跎せんと欲す。山老いて雲の行くこと急に、雨新たに水の響くこと多し。半宵 眠り得ず、燈下 黙して蛾を看る。）

三年猶患眼、何処好医盲。崖圧浴場立、湖連牧野平。雲過峰面砕、風至樹頭鳴。偏悦遊霊境、入眸景物明。（三年 猶お眼を患う、何れの処か好し盲を医さん。崖は浴場を圧して立ち、湖は牧野に連なりて平かなり。雲は峰面を過ぎて砕け、風は樹頭に至りて鳴る。偏えに悦ぶ 霊境に遊び、眸に入りて景物の明らかなるを。）

「其六」「其七」の詩には「其五」の「臥」から連想したかのように病について詠われている。そう言えば陶淵明は帰隠の願いを果して白雲の中に棲みつつ

も常に愉快だったわけではなく、ときに病に苦しんでいた。「示周続之・祖企・謝景夷三郎」に「負痾頽簷下、終日無一欣」とある。陶淵明に憧れ帰隠的世界をうたった白居易や蘇軾が苦しんだのは、漱石と同じく眼病であった。「眼花凝似珂」は、蘇軾「安国寺尋春」の「病眼不羞雲母乱（病眼は雲母の乱るるを羞ぢず）」に倣ったものだ。「燈下黙看蛾」は白居易「晩歳」の「看燈覚眼昏（燈を看て眼の昏きを覚ゆ）」のように、眼病の苦しみを自ら確認する行為である。

白居易が「東南行一百韻」に「壮志因愁減、衰容与病俱（壮志愁に因って減じ、衰容病と俱にす）」、蘇軾が「謝郡人田賀二生献花」に「老守仍多病、壮懐先已灰（老守 仍（しき）りに多病、壮懐先づ已に灰す）」と詠ったように、病は詩人達の功名にあくせくする意欲を奪っていく。それによって詩人達はますます帰隠の思いを深くし、病を口実にもして帰隠の世界に埋没し易くなる。漱石は白居易や蘇軾のように老いてもいないのに、同じ眼病を持つ親近感から、彼らと同じく病こそが俗に背を向けたがる気持ちに拍車をかけていると言いたがっているようだ。実際のところ、漱石が子規に向けて眼病の悪化を訴えたのは同年七月であり、身体の苦しみが浮世を忌避する感情を増したことは想像に難くない。しかしこの詩には、どことなく陶淵明的世界の住人と自分が同じ特徴を持つことを発見して安堵するような、また憧れの詩人達の愚痴っぽさを真似て面白がるような、ユーモアも感じられる。

「豪懐空挫折、壮志欲蹉跎」とは、陸游「遣興」の「懣拈如意舞、狂叩唾壺歌…功名莫看鏡、吾意已蹉跎（懣って拈ず 如意の舞、狂って叩く 唾壺の歌…功名 鏡を看る莫かれ、吾が意 已に蹉跎たり）」を意識しているだろう。漱石の旅立ちの詩には「一曲唾壺砕」とあった。そのとき壺を砕くとは功名客である子規の豪快さを表わしていた。ところがこの眼病詩で漱石は己も大志を懐く者だったことを告白している。大鵬に笑われる蜉蝣の自分も、飛ぶところは卑いかもしれないがやはり大志を持っていたというのである。もしかしたらその志には自分も子規と同じく功名の客、埋塵に生きる人であるという意味もこめられているかもしれないと思う。

六

「函山雑咏」最後の詩には締め括りとして再び「白雲」が登場し、詩人の「帰」への思いが表わされる。

恰似泛波鴎、乗閑到処留。渓声晴夜雨、山色暮天秋。家湿菌生壁、湖明月満舟。帰期何足意、去路白雲悠。（恰も似たり 波に泛ぶ鴎の、閑に乗じて

到る処に留まるに。渓声 晴夜の雨、山色 暮天の秋。家湿りて菌は壁に生じ、湖明らかにして月は舟に満つ。帰期 何ぞ意とするに足らん、去路 白雲悠たり。)

李白「陪侍郎叔遊洞庭酔後三首 其二」に「船上斉橈楽、湖心泛月帰。白鷗閑不去、争払酒筵飛（船上橈を斉しくして楽しみ、湖心月を泛べて帰る。白鷗閑にして去らず、争って酒筵を払って飛ぶ)」とある。漱石はこの鷗のように気侭に山の中に居座って帰ろうとしないようである。「其一」で帰郷の思いを口にした詩人は、今は帰隠の世界に浸っているのだ。

王維が「送別」に「君言不得意、帰臥南山陲。但去莫復問、白雲無尽時」と詠うように、帰隠に憧れそれを果す詩人達は「帰」を帰隠の意味で用いる。漱石は帰隠に憧れながらそれが決して果されないことを強烈に意識し、そのため帰隠の世界を去って浮世へ戻ることを「帰」と言う。彼は浮世への感情を変化させたわけではない。浮世を嫌えば嫌うほど、自分が帰らねばならないところがそこだという思いも増すだけである。但し、起って去っていかねばならない道は、自分が郷里を去ってきた道でもあり、いつでもその道は通じていて白雲が消えることがないことを彼は確かめ得た。帰隠に憧れる詩人達のようにいつも帰隠を思い続けることはできるのである。

おわりに

以上のように、「函山雑咏」は一首目から八首目まで、作者自身が浮世から徐々に離れて白雲の世界の中へ入り込んでゆく様を、実際の時間経過に忠実に描いている。そして一貫して帰隠の世界への憧れをそのテーマとしている。但し、作者は帰隠の世界への志向を描こうとしつつ、自己の本当の「帰」は帰郷即ち反帰隠の世界に属していることの自覚も隠さず表わそうとしており、それが先行する多くの帰隠志向詩と異なる「函山雑咏」の大きな特徴となっている。帰隠対反帰隠というのは古典的なテーマでもあるが、漱石はこの「函山雑咏」に丁寧に表現することを通じてその自己の中の葛藤にもより自覚的になったと思われ、このテーマは後に小説創作に活かされることになる。その意味でもこの作品は重要かもしれない。

最後に「函山雑咏」のもう一つのテーマについて。陸游は「三歯墮歌」に「功名富貴両悠悠、惟有杜宇可与謀」と詠っている。子規が喀血したのは漱石が「函山雑咏」をつくる前年であり、不如帰不如帰とやかましく鳴く鳥の名を持つ友人が議論相手であることは、漱石の陶淵明的世界に対する感情に多少なり

とも影響したと思われる。上に述べたように「函山雑咏」は陶淵明的世界への憧れを描くことを重要なテーマにしており勿論漱石はその点大真面目ではあるが、しかしそれを一番に見せるのは子規であることも充分意識されているだろうし、事実この詩はまず子規に披露され添削されているのである。「函山雑咏」は先に挙げた子規書簡の「淵明冠を掛けて菊を東籬にとらずんバ帰去来の賦なかるべく」という言葉への返答、どれ程かは量り難いが賛意の表れであるとも考えられる。同時に、詩中での「帰」の多用などは裏に子規を微笑ませる諧謔の意が込められてもいると思われる。子規が喀血したとき、漱石は「帰ろふと泣かずに笑へ時鳥」「聞かふとて誰も待たぬに時鳥」と書き送っている。子規は不如帰不如帰と鳴いているが、それは一体白雲の中から聞こえてくるのか、それとも功名に役役としなければならない浮世――もうすぐ大学の授業も始まるが――から聞こえてくるのか。この問い掛けが、作品の底で静かに笑いを誘おうとしているものであり、読む者に上と下から子規の鳴き声を聞かせる不思議な効果を生んでいるのである。

注

（1）テキストは『漱石全集』第十八巻（岩波書店 1995）を使用。

（2）参考にした注論は次のものである。吉川幸次郎『漱石詩注』（岩波書店 1967）一海知義『漱石全集』（岩波書店 1995）松岡譲『漱石の漢詩』（朝日新聞社 1967）渡部昇一『漱石と漢詩』（英潮社 1974）飯田利行『漱石詩集譯』（国書刊行会 1976）中村宏『漱石漢詩の世界』（第一書房 1983）斎藤順二『夏目漱石漢詩考』（教育出版センター 1984）小村定吉『夏目漱石名詩百選』（古川書房 1989）

（3）『漱石全集』第二十二巻（岩波書店 1996）。この「美人」は特定の誰かを指すのではない。先に帰郷道中の子規が「当年去路従何処、望美人兮天一方」。次に漱石が子規宛書簡で「昼寐して夢に美人に邂逅したる時の興味抔は言論につくされたものにあらず」。子規は美人を夢見る発想は陳腐と返し、「美人」は更に漱石から子規への返答。

（4）『子規全集』第十八巻（講談社 1977）

（5）漱石の同年一月の子規宛書簡に「可成早く御帰り〜もう仙人もあきがきた時分だろうから一寸已めにして此夏に又仙人になり給へ云々」、子規同年の「出京帰郷」に「飄〻為客似仙遊」。二人にとって「仙人」とは『荘子』『列子』『神仙伝』の世界の者ではなく、俗世を離れた隠者、旅人に近い。

（6）「嗤」について他に次の影響がある。蘇軾「与周長官・李秀才遊徑山、二君先以詩見寄、次其韻二首 其一」の「肯将紅塵脚、暫著白雲履。嗟我与世人、何異笑百歩。功名一破甑、棄置何用顧」。菅茶山「病中雑詩五首 其二」の「笑他人世裡、鵬鷃共営営」。

（7）『子規全集』第八巻（講談社 1976）
（8）『漱石全集』第十八巻（岩波書店 1995）